



あの、津波さえなかったら…

羊蹄医師会 医報通信員
留寿都診療所

大 泉 樹

医師会の会員数が少ないのでと何かやっってくださいと頼まれ、医報通信員を拝命してから、あっという間に10年になりました。いつも役に立たない通信員でご迷惑をおかけしています。今回も羊蹄医師会の情報をといておりましたが、エッセイでも許していただけるということですので、副業(?)でやっておりますNGOの活動について、皆さまにお伝えしたいこともあり書かせていただきます。

私は、東日本大震災では震災直後より名取市の医療機関に入り、その年の4月から9月は気仙沼市役所の在宅、仮設住宅訪問のコーディネーター、10月以降は医師不足の医療機関での診療支援を中心に、震災後1年のうちの120日、2年目は40日間を被災地で働かせていただきました。

現在も2つの活動を続けています。一つは気仙沼の階上(はしかみ)地区で仮設住宅のコミュニティ支援のためにできた地元団体の医療アドバイザー、もう一つは昨年5月に石巻市の4,000人の暮らす大仮設住宅団地に開設された石巻市立病院開成仮診療所の支援です。この診療所では最初は診療支援が中心でしたが、最近では仮設住宅の方々の訪問や住民への健康相談会のお手伝いをしています。

石巻での仕事の際は、仮設住宅団地の中にある福祉仮設住宅棟で寝泊まりしています。ここは、介護サービスのついた応急の施設なのですが、しっかりして広くてきれいな、仮設住宅とは全く違う造りの建物です。入居している要介護の方や職員さんたちと朝のラジオ体操と散歩から1日が始まります。

先週の滞在のときですが、50代の男性と一緒になりました。彼は近くの仮設住宅で暮らしていましたが、仮設1年目の冬くらいから、少しずつ咳がでてきて、どんどん増悪し、眼瞼浮腫、顔面の浮腫もでてきて、ただでさえ物音をたてると隣家に響く仮設住宅で夜通しの咳発作が続き、咳をこらえる辛さに耐えかねて開成仮診療所を受診されました。診療所では、この症状は環境が影響していると考え、市にお願いして、福祉仮設に避難していただいたところ、浮腫も咳もみるみる改善してきました。

彼の住宅はカビだらけだそうです。壁はむき出しのトタンで、狭く、部屋数もないので、夜は居間のこたつを片付けて布団をひいているそうです。「こん

なところには人を招くこともできないから“引きこもり”になるのもしかたないよ」とは「もうすぐにも出たいのに、きっとあと5年は出られないよ」と嘆く彼の妻の弁です。

実際、仮設住宅内での引きこもりやアルコール、うつ病や度重なる地震で具合を悪くするPTSDの患者さんの受診や保健師さんからの相談も多いです。また、せっかくできかけた仮設住宅でのコミュニティも少しずつ家が決まって出ていく人がでてきて、また壊れてしまう状態もあります。残された人の辛さと不安も人によっては大きいようです。

「あの、津波さえなかったら…」という彼の悲痛な叫びを胸に、僕は羊蹄山麓の自然豊かな村の広いわが家への帰途につきました。

